

〔論 文〕

K・ヒルティ『幸福論』における労働と休息

上野 正二

一、はじめに

時代は回る。二十年ほど前、この国では貿易黒字の解消のために、長い歴史背景を持った国民の勤労精神を破壊し尽くす暴挙に出た。それとほぼ同時に、国民のレジャー創生を旨い口実にして、国内に無数のレジャー施設を建設し回っている。この方は、レジャー創生がそもそも誰のためのものであったかが、最近漸く誰の目にも明らかに becoming、結局は国民はただの踊り子に過ぎなかったことになる(いな、レジャー施設の資金の出所が国民の懐からむしり取って蓄積したへ年金基金)であつてみれば、そうとだけは言えない訳だ)。

ありもせぬ「レジャー精神」のために振り回されたのは、子供たちもそうであつた。へゆとり教育」などという中味のまるで浮ついたものが宣伝され、戦後長い間にらみ合っていた日教組と文部省が過去の大事な争点もかなり捨てて裏取引の材料にしたのが、学校週五日制であつた。文部省の某役人がかつて何を宣伝していたか、私たちはその人物の名前と共に容易に忘れる訳には行かないのである。学校教育においては、道徳教育と人権教育、さらにボランティア教育というものも、一人の子供を生み出すための一つのことながらでなければならぬにも拘わらず、次々に思いつきを現場に押しつける酷い無責任行政が

行き渡つたのであつた。教師と生徒の余暇は増大したと思われた。

さて、そうして二十年が経過した。学校教育では漸くにして従来の教育内容を三十分削減した教科書が出回り、新学習指導要領が発表されて二年経過したところ、文部科学省では同一のトップ(遠山大臣)が変わりもしないうちに、指導要領の弾力的運用などと言いつつ始めた。欠陥要領であつたことは明白であるが、どのような点での欠陥があつたのかは、ほとんどの関係者の間にもまだ自覚はされていないのである。それというのも、へゆとり教育」は一面では知識詰め込み(ドリル学習)の弊害が認識され、欧米に普及している頭を善くする学習方法や、それらを遙かに越えたものでありながら関係者の不真面目のために忘れ去られた日本の誇るべき授業方式が導入される格好の機会であつたのだ。しかるに、文科省官僚のトップにも教育学部の教授たちにも、本来の問題が何であつたかの自覚はなかつたようである。五日制にあわせたカリキュラムが出回つてすぐのところから影山方式というドリル学習以外の何ものでもないものが、学力を付ける切り札であるかのように大手を振つて通用するようになった。こうして、この国では本道の学習方式を導入する千載一遇の好機は永久に(たぶん)失われてしまった。そして、頃や悪し。「レジャーのすすめ」は、この不況下一般企業の労働者、失業者の気の毒な立場を思えばかつてか、とても口には出来ぬ状況となつていのである。だが、少なくとも、大学はレジャーランドでなければならぬ(レジャーの何たるかを知らない国民が「大学のレジャーランド化」を憂いてみせたのを知らなければならぬ)。なぜなら、真の学問は閑暇のうちにおいてでなければならぬ(だが、その閑暇こそ leisure という立派な名前を以て訳されることばであるからだ(学校 school という語も、ギリシャ語のスコレーという閑暇を意味する言葉に由来しているの

だ)。

筆者がこのように状況をそれとして認識することができたのは、カール・ヒルティ (1833~1909) の影響によるところが少なくない。この小国民の間で、「勤勞」がまた恥ずかしく思わずに口にされるような状況に立ち返った機会に、ヒルティを再考しておくのは無駄なことではないと思う。

二、ヒルティ「労働術」

『幸福論』第一部の冒頭を飾る「労働術 Die Kunst des Arbeitens」(以下に主として使用させて貰う岩波文庫の草間平作氏訳では「仕事の上手な仕方」)は、「よい習慣」「時間の作り方」と共に、中学校を卒業したばかりの十五歳の筆者らに、校長から強く読むことを勧められた文章であった。そして、筆者はこの「労働術」から、その後四十年間に、どれほどの恩恵を受けたか計り知れない。高校生にならよく分かる説得性を持っているのである(この本を読んだ後では、その後学生の間でよく読まれた渡部昇一氏の『知的生活の仕方』も、気の抜けたサイダーのような味に過ぎなかった)。この、いまや労働術の古典と呼んでもよいかもしれないこの本は、次のように説く。

「仕事の上手な仕方は、あらゆる技術のなかでもっとも大切な技術である。というのは、この技術を一度正しく会得すれば、その他の一切の知的活動がきわめて容易になるからである」。それなのに、ひとはこの技術を会得しようとはせず、「できるだけ少なく働くか、あるいは生涯の短い時間だけ働いて、残りの人生を休息のうちに過ごそう」というのが、一般の傾向である」(13)

ヒルティにとっては、仕事をする事、労働は、それ自体が無条件

に善であり、それに対して同時代のスイス国民の多数は、労働の方法および労働の意味を知らないために、それをできるだけ避けようとする、という対比が示されているようである。しかし、ヒルティはこの二つの事柄を明らかにすることによって論述を進めるのではなく、もし、万人の求めているはずの幸福、あるいは休息が労働の中にのみあるとしたら、この労働を避けるという一般的傾向は、まさに不幸の種類であるということになるだろう、と述べ、果たして労働と休息は両立しない対立物であるかどうかを検討せねばならぬ、とする(13)。幸福というのは、ヒルティの場合しばしば幸福感に還元されるのだが、「真の休息」へ人間の健全な生活へ政治的・倫理的なよき活動へという古来からの概念にしたがって考えても、みんなが労働を厭わなければほとんどの問題が解決するであろう。だが、「どんな高い精神の人も労働をし続けることは願わない」(14)、「全ての人が休息を求める」(14)というところから、ヒルティは、アダム楽園追放の際の言葉「もし労働が避けられず、しかも休息はこれと反対のものであるならば『あなたは額に汗してパンを食べねばならぬ』(創世記三の一九)は「呪いの言葉」であり、地上はじつさい涙の谷であろう(原文ドイツ語は接続法ではない)、というのである。

次にヒルティは、社会問題を一つ紹介する。古代から現代まで一貫して、人間らしい生活は、他人の労働の上に成り立ってきた。文化は富の土台の上のみ栄え、富は資本の蓄積により、資本蓄積は不正な労働者搾取による。したがって文化は不正から生ずるといっておかしくないことになっている。こういう問題を解決するには、誰もが労働すること以外には不可能であるが、ここで人に労働を強制することは真に役立つ働きを生むに有効ではなくへひとの心に働くことによるこびを呼び起こすこと⁽¹⁵⁾が大事だ(15)と述べ、いかにして働くよるこびを喚

起すべきかを説く。すなわち、

「働きのよろこびは、よく考え経験することからのみ生じる」(15)
働くことのよろこびは、たしかに教訓を垂れることによつては伝へることは出来ず、当人に實際やつて見せることによるといふのである。今日子供たちをボランティア活動に参加させたり、都会人をグリーン・ツーリズムに引き込んでゐるのは当にその体験を得させるためであるが、この場合へ働くよろこびはまさに働くことの中でしか体験し得ないのは当然であるとしても、休息が活動、労働のさなかにある、と言るのであるか。「ひとの求める休息は、肉体と精神を全く働かさぬこと、怠けることによつては得られず、適切な活動によつて生じる」(15)「本当の休息は活動のさなかのみある」(15)と。

ヒルティが休息が活動のさなかにあると例示するのは、こうだ。「すなわちそれは、精神的には、仕事に着々とばかり、課せられた任務がよく果たされていくのを見ることによつて得られるし、また肉体的には、毎夜の睡眠や、毎日の食事など、自然に与えられる合間の休みや、何物にもかえがたい日曜日の休養のオアシスの中に、真の休息は得られるのである」(16)。「こうした自然の休憩によつて中断されるだけの、絶え間ない有益な活動の状態こそが、この地上で許される最上の幸福な状態なのである。ひとはこれ以外にどのような外的な幸福も望んではならない」(同)

彼は、さらに一つ付け加える。「真の仕事なら、どんなものであつても必ず、真面目にそれに没頭すればまもなく興味が湧いてくる」(16)。「人を幸福にするのは仕事の種類ではなく、創造と成功のよろこびである」(同)と。ただし、没頭するのがむづかしいのである。これについてはヒルティはその方法を後に示す。

さて、仕事の種類は問わぬと述べたが、早速に例外が示される。女性の手芸、道楽半分の無意味な軍人生活、ピアノの稽古のような「芸術」修行の大部分、スポーツ、などおよび機械的で部分的な仕事である。機械を使うような仕事は人間の尊厳の觀念に反し、決して人を満足させない、と。チャップリンが映画「モダンタイムス」で示した流れ作業の単純労働の悲惨さを憶えている者は、こういう記述は説得力があるのかもしれない。

以上のことをよく考え納得し、やる気の湧いた者のための教訓Ⅱ(21) (21) (30) が下に六点ほど示される。

①仕事好きになるには、怠惰に打ち勝つこと(22) (22)。生まれつきには人は怠惰だから、それに打ち勝つ動機を自らに与えなければならぬ、と言ふのである。仕事の動機には、次元の低いものと高いものがある。低い動機には名誉心や食欲、わけても生活維持の必要が挙げられる。これらには、快を目指して苦を選ぶという錯倒があることを指摘することが出来るだろう。動機が高い場合には、「仕事そのものの愛」と「人々のための愛と責任の感情」が挙げられる。「偉大なる思想に生きよ」「早くから自分自身を越えて自分だけのために生活しないということが、青年を向上させ、強健にして、事に屈しない力を与える唯一の道」(23) (23) ということが付け加えられるだろう。また、高い動機に発した仕事の場合には、人は結果には拘泥しないという特質を持つ、という(22) (22)。世には、「小さな親切運動」などという大きなお世話に転化しがちなものが横行しているが、ヒルティの言うのはいわばへ大きな親切運動であり、平和運動などが挙げられてゐる。これらは、別の書物では、自分の仕事で満足を得られないと不平を言う者に対して、副業 Nebengeschäft (今日のボランティア仕事) を持てと述べていることに該当するであろう。

②身体的習慣と同様に精神的な習慣があるとして、習慣形成の重要性が指摘される。「どんな人間の美德も、それがまだすっかり習慣となつてしまわない限り、たしかにわが物とはいえない。だから、徐々に勤勉の習慣を養うならば、怠惰の抵抗はしだいに弱まり、ついには勤労の生活が欠くことのできないものになる」(24) この習慣の問題に關しては先に触れた「良い習慣」も併せ読むべきであろう。

具体的には、「思い切つてやり始めること」(24)「毎日決まつた時間を仕事に捧げよ」という指摘をしている。

③本を読むには、本論から始めること、容易なところからとにかく始めよ(26)、先のことを考えすぎないこと、丁寧にするべきだが完璧を期さないこと、といった点が指摘される。じつにこれらが読書嫌いであつた筆者に、その後どれだけ有用なアドヴァイスとなつたか、計り知れない。

④元氣と興味が無くなつたら強いて続けない。仕事を変えればいい(27)。③の完璧を期さないこと、という提言と相俟つて、私たちは同時に幾つもの課題を持つがよいということを示している。一つ一つ完全に仕上げてゆくという考え方は、私たちがどれだけ完璧だと思つても、どこか漏れがあるものだということを考えに入れれば、危うくなる。同時に幾つかの仕事を進めていると、どこかで相互に關連があることが分かつて来るものであり、有益なのである。それに加えて、ヒルティは興味が無くなつた時のリフレッシュメントにもなる、と教えてくれる。

⑤多く働くためには力を節約せねばならぬ。無益な活動(朝の新聞読み、会合)

⑥精神的仕事を容易にする最も有効な方法は繰り返すこと(28)。「一度、この、仕事に没頭するという本当の勤勉を知れば、ひとの精神

は、働き続けてやまないものである」(29)。こうすると、「このよう(あまり長すぎない)休息のうちに、知らぬ間に仕事がかどつてくるのを見るのは、まったく不思議である」(29)と言ひ、「新たに始める仕事は、今度はまるで、その休息の間にわれわれの力を借りず自然に成熟したものを、骨折りなしに刈り入れるかのように思われることさえ珍しくない」と付け加える。

三、ヒルティにおいて残る問題点

ヒルティは労働と休息は対立物かどうか、という問題を提出し明らかにしなければならぬと述べた。この問いは果たして解決されているだろうか。

私は紹介の冒頭に問題を分かり易くするつもりで少し言い換えて「もし、万人の求める幸福、あるいは休息が労働の中にのみあるとしたら……」と書いた。正確には「働きと休息とが対立物だとすれば、事実上、この社会の病氣はどうていなおる見込みはないであろう」(13)となつてゐる(ちなみにこれはドイツ語では「接続法」という語法が用いられているのだ)。よるこびと同じ意味で理解されることの多い幸福が、労働と対立せず、むしろ労働の中にあるということならば、同意は得られるとしても、活動と非活動という全く相反する意味を持った労働と休息とは、対立物でないなどということは、言語破壊を意味するであろう。ドイツ語でも労働 Arbeit は身体的もしくは精神的な活動、仕事(Körperliche od. geistige Tätigkeit, Beschäftigung, Betätigung)、休息 Ruhe とは沈黙、静けさ、閑(Schweigen, Stille)と書かれてゐる。

さらに次に引用した「創世記」の文章が呪いの言葉かどうかという

問題についても、「どんな高い精神の人も労働し続けることを願わない」という命題と「全ての人が休息を求める」という命題から、どうして「もし労働と休息が対立するものであるならば『あなたは額に汗してパンを食べねばならぬ』という言葉はまったく残酷な呪いの言葉であり……」という帰結を引き出すのかも不明である。まず、「どんなに高い精神の人も労働し続けることは願わない」というが、この労働が「身体的あるいは精神的活動」であれば、多くの人が労働し続けることを願っていると云えるだろう。なぜなら、たしかに死者を送るのに「永遠の休息」に就くことを祈ることはあるが、安息が唯の静寂でしかなければ、我々自身はそんなものは願わないであろうからである。あるいはこの世が終わってもなを生きるとしたら（それは死ぬより望ましいことであり）それは活動が出来るのでなければならぬ。夜の睡眠も昼間の休息も、より充実した活動をするためにエネルギーを蓄える「間」なのである。次に、「呪い」に関わることである。ヒルティ自身はこの聖書の言葉を呪いの言葉であると明示している訳ではないが、「もし労働と休息が対立するものであるならば、『あなたは額に汗してパンを食べねばならぬ』という言葉は、まったく残酷な呪いの言葉であり、地上は涙の谷であろう」という際には、先の場合とは異なり「直説法」を用いているのである。そして、この文章の後には「もしそうであるならば、人間らしい生活を営みうるのはただ少数にすぎず、ここにこそ本当の呪いがあるのだが」として「自分と同じ人間を強制して労働させること」を挙げている。そもそも彼は休息と労働とを矛盾対立物ではないと考えているのか？たしかにそのようである。したがって、アダムの樂園追放に関して、彼の同時代人M・ウェーバーが『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』で紹介しているプロテスタント的な「新樂園」の主張は、彼の主張ではな

いという、面白い結論が導き出されそうである。

「新樂園」とはミルトンの『失樂園』の末尾に、次のように記されていることを意味する。

「彼らは、ふりかえり、ほんの今先まで

自分たち二人の幸福な住処の地であつた樂園の東にあたるあたりをじっと見つめた。その一帯の上方では、神のあの焔の剣がふられており、門には天使たちの恐ろしい顔や燃えさかる武器の類が、みちみちていた。彼らの眼からはおのずから涙があふれ落ちた。しかし、すぐにそれを拭った。

世界が、……そうだ、安住の地を求め選ぶべき世界が、今や彼らの眼前に広々と横たわっていた。そして、摂理が彼らの導き手であつた。二人は手に手をとって、漂泊の足どりも

緩やかに、エデンを通つて二人だけの寂しい路を辿つていった。」

「必要なことは、ただひたすらお前の知識に、それにふさわしい行為を加え、信仰を加え、美德と忍耐と節制を加え、さらに、やがて聖き愛という名称で呼ばれるはずの、そして他の一切のものの魂でもある愛を、加えることだ。そうなれば、お前もこの樂園から出てゆくことを嫌とは

思わないであろう。自分の内なる樂園を、遙かに幸多き樂園を、お前もつことのできるからだ。」

カトリシズムの代表的作品の一つであるダンテの『神曲』「天国篇」末尾では、詩人は天国において満ち足りて言葉もなく神の神秘を直視しているのと比べてみるといい。ここにあるのは、「地はあなたのためにのろわれ、あなたは一生、苦しんで地から食物を取る」（創世記3・17）「あなたは顔に汗してパンを食べ……」（同19）を前提にした「世俗の日常労働に宗教的意義を認める思想」であり、「選ばれたキ

リスト者が生存しているのは、それぞれの持ち場にあつて神の誠めを
実行し、それによつて現世において神の栄光を増すためであり……し
かも、ただそのためだけなのである。ところで、神がキリスト者に欲
し給うのは彼らの社会的な仕事である」と要約することができよう。

他方、我々が子供の頃から親しんでいるテレビドラマの「大草原の
小さな家」(ローラ・インガルス・ワイルダー)では、まさにピュー
リタニズムの世界が描かれている。労働と幸福の組み合わせによる労
働賛歌は、ヒルティの周囲世界とは異質であるようだ。スイスのプロ
テスタンティズムが遅れていたのか(ついでながら、エマソン(1803
~1883)による仕事論というのも面白い主題であろう)。ヒルティは、
本當の呪いとして人間が人間を強制して労働させることを挙げている
が、プロテスタンティズムの地域に芽生えた「資本主義の精神」は、
その半分は労働者が自らすすんで経営精神に服するところに成り立つ
のであつて、これをしも拝金主義の先棒と批判するのであれば、ヒル
ティ自身も同じ役目を務めている者として非難されねばならないだろ
う。

さて、ではヒルティの「本當の休息は活動のさなかのみある」
(15)という主張は先に触れた箇所どれほど証されているか、ある
いは証されていないか、検討してみよう。

イ、「それは、精神的には仕事に着々とはかどり、課せられた任務
がよく果たされていくのを見ることによつて得られる……」(16)。こ
こでは、休息が静寂という意味では、とても理解できぬ話であるか
ら、次に触れるように幸福感、よろこびといった意味であるとしよ
う。その場合、

イ―①仕事に着々とはかどることによるこびを感じるの、仕事は

かどつて「半分済んだ、あと三分の一だ、あと五分の一で終わりだ」
と、終了するのを楽しみにしてのよろこびではないか、どうか。もし
そうだとしたら、これは仕事をしているよろこび(Ⅱ仕事の中にある
よろこび)ではなく、休息(ふつうの意味の)のよろこびでしかない
であろう。

イ―②多くの人の中には、苦痛に耐えること自体をよろこびとする人
が居て、「いま仕事がつつい。きつい。きつい。きつい。だけど私はきつい
がうれしい」と自虐的快樂主義を前面に押し出す。ヒルティ先生がま
さかこのようなへ錯倒精神をすすめているとは思えない。

イ―③「達成感」というのはどうだろうか。仕事として成し遂げた善
をよろこぶということは、イ―①とは少しニュアンスを異にして、積
極的に主張されているであろう。「この世の最大の不幸は、仕事を持
たず、したがつて一生の終わりにその成果を見ることのない生活であ
る」、「それゆえこの世には労働の権利というものがあり、またなけれ
ばならないわけだ」(16)。幸福とは各々の人が欲求しているものを手
に入れた状態、もしくはその時のよろこびである、という幸福概念
は、必ず何らかの活動と成果を要求するものであるからである。

イ―④しかし、ここで彼が「真の仕事ならどんなものであつても、必
ず真面目にそれに没頭すれば間もなく興味がわいてくるという性質を
持っている」(16)と言ひ添えるとき、我々は世に真面目な仕事であつ
ても興味が湧いてくるとは言えず、達成感も得られない仕事に就いて
いる多くの人が居ることを思い起こす。今日「バーンアウト症候群」
と呼ばれている重症患者相手のナースの仕事がその代表であろう。ヒ
ルティは「どんな仕事でも」と書いたことにすぐ後に条件を付け、見
かけだけの仕事は除外するのだが、医療現場の看護活動は、まさか例
外にする訳には行かないであろう。この仕事に「よろこびが感じられ

ない」ことに對してどう対処すべきなのだろうか。考察は後に回すことにして、今は問題点のくじり出しに専念することにしよう。

ロ、「休息が活動のさなかにある」ことの例として次に「また肉体的には、毎夜の睡眠や、毎日の食事など、自然に与えられる合間の休みや、何物にもかえがたい日曜日の休養のオアシスの中に、眞の休息は得られるのである」と言う。だが、

ロ―①毎夜の睡眠、毎日の食事などというのは、ヒルティもそうみているように「自然に与えられる（労働の）合間」の休み」であるかぎり、これでは休みが「労働のさなかにある」とは言えない。

ロ―②日曜日の休養というオアシスは何物にもかえがたいものであるとしても、もし日曜日の休養そのものに意味があるのであれば、あとの六日間の労働そのものに意味があることにはならないであろう。

ロ―③だが、日曜日の休養に意味があるとして、そこに何が見出されるべきか。少なくともここではヒルティは語っていないのである。

ロ―④睡眠も食事も勝手放題であれば、却って飽きが来る。そこで適当な運動がビールを旨くするのだ、という意味では、へ労働Ⅱスパイスと説と呼ばれるであろうが、これではやはり労働は主たる関心事ではないことになる。

ハ、こうして右の二つの文章に続けて「こうした自然の休憩によって中断されるだけの、絶え間ない有益な活動の状態こそが、この地上で許される最上の幸福な状態なのである。ひとはこれ以外にどのような外的な幸福をも望んではならない」（16）とされる。

ハ―①ここでも、休息が活動状態を中断させていることをヒルティも認めていることが確認できる。

ハ―②私にはヒルティがどうしてここで休息の方ではなく活動状態の方を幸福な状態としようのかこのままでは理解できない。それという

のも、「優れた性質（Ⅱ徳）に基づいた（活動）」を以て幸福の定義とするのはアリストテレスであるが、ヒルティがこういう幸福概念を用いるのは、この『幸福論』全体においても希なのである。さしあたり第一部所収の「幸福」という題の論文を検討してみるといいだろう。

こうして、我々は活動のさなかにある休息とは何であるのかという問いを、なお続けなければならぬ。旨くゆく見込みはある。ヒルティ先生のあげている例とは別のものを想像することができからである。世に活動が仕事でもあり、よろこびの種となっている職業が見られる。たとえば絵かき、音楽家、哲学者がそれである。いや、ヒルティはあげないのだが、弁護士、教師、医療関係者だけでなくほとんどの職業が、あるカンタンな訓練を施されるならば、仕事を以て至上のよろこびとすることができるのである。それは、芸術家のへ活動のよろこびを分析してみれば分かることだ。「労働術」を論ずるには、このカンタンな訓練についてごく簡単にでも触れないでは、「一応論じた」ことにもならないであろう。だが、その点については新たな節を設けて集中的に論じなければならぬ。

ヒルティ先生のあげあし取りをもう少しやっておくことにしよう。彼はすでに触れたようにイ、女性の手芸、道楽半分の無意味な軍人生活、ピアノの稽古のような芸術修行の大部分およびスポーツ、口、機械を使用する仕事、機械的で部分的な仕事を、「没頭すれば必ず興味を湧いてくる仕事」から除外した（18、19）。それはヒルティの時代に現実にそこには休息（Ⅱ満足感）が見出されていなかった、ということを示しているのだろうか、彼はその理由（イに関わるものだが口にもまるで無縁ではない）を注記している。少女に終日おとなしく椅子にかけて銀のスプーンを持つていたら一グルデンやろうと約束し

だが、半時間もすると少女はスプーンを投げ捨てた、その理由と同じだ、と。しかしそれでもまだ真の理由は明示されてはいないだろう。イー①そもそも少女がなぜスプーンを投げ捨てたのか、その理由は、我々はこれをドストエフスキー『死の家の記録』、フランクル『夜と霧』などの記事により補足することが出来るであろう。それは先に触れた〈達成感〉と関わるし、また〈仕事の動機〉に関わることである。ドストエフスキーは、「もしある人間に最も残忍な刑罰を加えて、極悪無慚な殺人犯でさえ慄然として、その刑の名前を聞いただけでぎよつとするような目にあわしてやろう、その人間を精神的に粉碎し抹殺しようと思つたら」使用する方法（河出書房新社「ドストエフスキー全集」第四卷二三頁）として、「桶の水を別の桶に移し、またもとの桶に戻すような仕事」「ひと山の土をひとつの場所から別の場所へ運び、それをまたもとの所へ積み直すような仕事」（同）を挙げている。これは『夜と霧』の著者の解説を用いれば、〈行為の無意味さ〉と表現することが出来る。自分の行為に意味を見いだせない人間は精神的に破壊されることになる（牛馬がそうなるとは聞いたことがないので、そういう奴隷的状态に安住し得ている人間が居たら牛馬並とすることになる）。したがって逆に言えば、人間らしく生きる、人間らしく行為するというのは、いかなる活動・作業にも意味があることを自覚することで行なければならない。フランクルがユダヤ人強制収容所から生還することが出来たのは、生きる意味を見失わなかったからだ、と述べている。では「死の家」で生きるにはどうすればよいか。この無味乾燥な行為に意味を見出せばよい、いな、見いだせなくとも意味を付与すればよい。ヒルティの紹介する少女はヒステリックにスプーンを放り捨てたというが、一グルデンの小遣いで何が買えるかを楽しく想像したり、その金で買った玩具で楽しく遊ぶのを想像すれば

よい。あるいは、その金を別の仕事で稼ぐとしたらどれだけ大変か、その労力を免除されたことをよるこぶことも出来る。死刑囚ならば、やがて其処を脱出し妻子の待つ家に帰り着いた喜びを毎時イメージし、その喜ばしい日を招き寄せるためには筋力を保持もしくは強化せねばならぬ、それをやっているのだ、と念じるのである。二十世紀のエグゼクティブたちは、肉体労働を忌避しながら、それぞれの意味をなすりつけて筋力トレーニングに励んでいるそうではないか。

イー②稽古事、スポーツが除外されることを奇異に感じるのは、我々が二十世紀人間だからだろうか。それならば我々は二十世紀人のために記事を仕立て直さなければならぬであろう。スポーツには「よろこびにふける」という意味があり、それは頭から児童に耽るに等しいと退けられるべきものではない。仕事自体が特別の意味を持つていると言うことを突き止め得ていない現状では、「仕事は遊び、休息のためにある」という主張だつて、ヒルティのものであるかも知れないのである。ヒルティが除外したいずれについても、我々はそれらに共通した一つの重要な要素が潜在していることを見落としてはならないだろう。それは、それらは真面目ではないとヒルティは言うかもしれないが、逆に、どれも真面目なものにしなければ面白くなる、という性質を持つていっていることである。女性の手芸が、たとえばピアノを弾くが、指使いもでたらめ、楽譜の指示などまるで無視しているのでは、ピアノを弾いているとも言えぬ。チェスを始めても、勝手に駒を進めあつて、勝敗にもまるで投げ遣りである……こういうのはゲームにならぬ。スポーツ、ゲーム、芸事、いずれもそれが成り立つための〈決まり事〉があり、それを最大限尊重しながらできばえのよさ、勝敗を競うところにこそ面白みは生じるのである。そうすると、畳の上の水練はバカにされるが、これらの遊びも実人生の修練と

位置づけることが出来るのである。今日、大学をレジヤランド呼ばわりする者が見あたらなくなったのは寂しい限りである。かつては、大学生が講義に出ずにゲームセンターで遊んだりサークル活動ばかり楽しんでる現象を、誤って「大学のレジヤランド化」と呼んでいたのである。しかしこの呼称はふさわしくない。大学は学ぶ者たちが学問に没頭してそのよろこびを味得する施設であるがゆえにレジヤランドなのである。レジヤは余暇・閑暇を指す語であり、スクールは閑暇を意味するギリシア語のスコレーと言う語に由来している。学校はほんらい詰め込みカリキュラムに追い立てられる処ではなく、精神活動をたのしむ処なのである。活動・仕事を楽しむコツを身につける場なのである。

ロー①機械仕事に関しては、シュヴァイツァーが『文化哲学』において『莊子』を引用して、人間は機械を使うと機械にたよる心が生まれる、機械にたよる心が胸中にあると、自然のままの純白の美しさが失われる、純白の美しさが失われると、靈妙な生命のはたきも安定を失う、と述べている。しかし、『莊子』自体が「天地篇」で、そういうのは一を知って二を知らない、と批判しているのである。

ロー②映画「モダンタイムス」でチャップリンが演じる、一日中ベルトコンベアーの前でネジを締める男の姿は、悲壯感を漂わしているとも評される。では、人間的な仕事を回復するために機械を追放すればいいのか。それも短絡的に過ぎよう。J・デューイの『学校と社会』において博物館の役割が説かれるところがあるので参照するといいたい。いま自分が対面している単純機械仕事は、もどれだけの労苦を必要としこれが必要ならばどれだけの成果しか上らないのか、と想像力を膨らまして行けば、この仕事を嫌って別にまた味気ない副業を持つ必要はなくなるであろう。この問題も、当面の単純機械仕事がいかなる

〈意味〉を担っているのか、という先の問題の応用問題である。

ロー③時計を作る工場で部品のみ作っている者は「全体」に関わらないことよって「人間の尊厳」の観念に反している、という批判(19)は、やはり右と同様に人間の〈精神性〉を高めて行くことよって乗り越えるほかないであろう。

右のようにヒルティの問題を見て来ると、どの問題点も、仕事・活動の意味・目的に係していることが分かる。ところでそうすると、我々は、ヒルティ自身が仕事のコツを語り始めるところで「仕事の動機」について語っていたのを思い起こす(つまり、本稿二節①)。ここに彼が、たとえば良き習慣の核として「善そのものである神」を想定していたとか、あるいは「偉大なる思想に生きようとせよ」と言う際に、「神を捉えること」もしくは「神に捉えられること」を念頭に置いていたか、などということはいわゆる「神に捉えられること」を念頭に置いたか、などということは我々には確認のしようがないのである(「幸福」の章で、あるいはそれに該当するのではないかと思われるものに出くわすのであるが、ここでも断定は下しがたい)。だが、これは重大な論点である。

そこで、以下にまた節を改めて、右に挙げた問題を仕上げる方策を考えてみたい。ヒルティ自身の評価についてはヒルティはそれらを全く意識していなかった訳ではないが、本章もしくは本書ではそこまで論じるつもりはなかったのだ、という仕方片づけさせてもらおう。なお、私自身の回答は、私が原理を発見したというのではない。すでにプラトン、アリストテレスが語っていることをヒルティの問題に応用したに過ぎないことを断っておこう。

四、仕事と休息、もしくは労働と閑暇が矛盾しないということについて

ヒルティの提示した問題としては、「真の休息が仕事のさなかにおいて得られる」かどうか、という問いだが、この問題に対して結論を見ておきたい。

まず、アリストテレスの『ニコマコス倫理学』の冒頭に、「いかなる技術、いかなる研究も、同じくまた、いかなる実践や選択も、ことごとく何らかの善を希求していると考えられる」という文章から始めよう。これは言い換えれば、人間の活動というのはすべて善を目的として行われるということであり、いま問題にしている労働・仕事もその中に含まれるのである。ここに善と呼ばれるのは、さしあたりは何でもよい、複数のものが考えられているとしてもよい。活動自体が目的とされる場合もあれば活動以外のものが目的とされる場合もある。いずれにしてもこれらの善あるいは目的の間にはいつそう優れた善・目的とその善を手に入れるために手段とされる善・目的とが区別され、しばしばこの目的のための手段自体が目的とされる別の手段が存在する。目的連関あるいは手段連関と呼ばれる。そしてさらにたとえば、造船、兵器製造、自動車産業、保健衛生等々の活動が戦争というより次元の高い目的のために存在するという訳である。造船という一つのまとまりに関しても、エンジン系統、操舵系統、兵器等の機装といったハード面と気象観測、操舵、艦砲操作、メンテナンス等に携わる乗組員の訓練、さらに乗組員の衛生管理などのソフトの面のさまざまな活動があり、これらを総括して戦闘の勝利という目的に向かうのである。あるいはまた、個々の人間のさまざまな活動のうちにも金銭（富）、権力、名譽、快、健康などを得るためのさまざまな活動が見

られる。

それでは、これらの全ての活動を総括する一つの目的といえるものが存在するであろうか。アリストテレスは、目的の連関が（直線的なものが考えられるにせよ、円環的なものであるにせよ）無限に続くことではないということから、そういう究極目的というものがあるとして論を展開する^(二七三)。

では、その究極的な善、神とも呼ばれる善は如何なるものか。これを語ることは極めて難しいとしても、次のようなことは、我々は語ることが出来るのである。

人間のあらゆる行為は、それをそれとして知っているにせよ知らぬにせよ、この究極的善を目指して行うのである。多くの場合、人は富や権力や快を手に入れることによって、何か知らないこの究極的なものに達し得ると思いつているのであるが、しかしいずれにしても、我々が日常の行為をするにあたっては、それを行うことによって直接に、また多くの場合、目的の連関の先に間接的に、快や富や権力を目指している限り、これらの行為を成り立たせているのは究極的目的である、ということになるであろう。

いまここに具体的行為として「医療」を例に取り上げてみよう。

医者——（行為）——→（患者↓究極目的）——→究極目的

患者が究極目的を目指しているということは、この際はまるで括弧に入れていてもよいことである。医者が医療行為をするというのはどういうことであるのか、というのが問題である。さしあたりは、患者に働きかけてこれを健康な体にする（なるべく病気を進ませない）というのが医療行為の意味であるというのは、小学生の回答としては

いいとしても、中学生でもそれではお粗末な回答と言わざるを得ないであろう。実はここには一つの「医療行為」がいろいろな「形」あるいは「意味」を担っているのである。医者も医者としてあるだけではなく、一人の人間として「生活の資を稼ぐ」という行為をしているとも、「隣人である患者を人間らしく処遇するために苦痛を除去し彼本来の人間らしい行為ができるように回復させてやる」という行為であるとも、「この作業を通じて自らが神の僕として神に命じられた業」をしている、とも言えるのである。最後の場合、彼はこれこそが彼の「善く生きる」へ形の実践＝幸福の実現として行っているとも言えるであろうが、これらのどの場合にも、人はそれが何らかの自分の究極の目的に間接的にもしくは直接に繋がることがらとして選択しているのである。したがって、究極目的が目当てにされて行為が成り立っているのである。そうしてみれば、まず行為する者は今行為する者として最高善によってここに存立させられている、と言い換えることができるのである。さらに、このいろいろな意味を担っている行為も、結局は究極目的をめざす手段もしくは、まさにその究極目的と見なされている限り、究極目的たる最高善によって存立させられていることになる。

人間は、ほとんどの場合、自らがそういう仕方動かされて行っているとは知らず、自らが行為の主体であると思ひ喜んでいる。そのために自分の為している行為が、へ善さへを帯びているが故に自分に選ばれているのであることを、いいかえるとへ行為の意味を知らずに、行為がなされているために、行為の種類によっては面白くないと思つて嫌々ながら行っていることにもなる。ここで彼の眼が啓かれさえすれば、その時には彼には驚くべき事が実現していることになるのである。すなわち、古代の人々がそれを目当てにして労働をしていたへ閑

暇へのまさに内容をなすところの、「我々の努力の息んだところに、自ずから生じる……もの」が。

この「人間の行為の構造」は、「存在の構造」と呼ぶことも出来るのだが、次のように言い換えることが出来る。すなわち、人間の世界におけるあり方は、見る者（意識主体）として見られるもの（対象・客体）にその都度対応して存在しているのであるが、この主体も客体も共に、それら自体によって存立している者でも存立し得るものでもなく、その都度主体の目指している最高善である神によって存立させられているのである、と。へ存立させられる」というのは、へ創造される」と言い換えてもいい。こういう人間存在を、あるいは人間の世界の構造を何らかの仕方で諒解するならば（これを筆者はへあるカンタンの訓練を施されるならば」と呼んできた）、その都度の自らの活動が如何に苦難を伴うものであっても、あるいはまた、たとえその活動に大きな外物として「機械」が介入することがあろうとも……安らぎを得るのである。

おわりに

右に「カンタンな訓練」と呼んでいる人間の行為、人間の存在についての一種の洞察は、西洋の伝統において「閑暇」の内容をなすものであった。たとえば、プラトン『国家篇』(407a)、セネカ『人生の短さについて』などである。とりわけセネカでは、閑暇と労働が矛盾せぬ一つのことながらとして論じられている。我々は次には、セネカを読むことによって、本稿で論じたりなかつたことがらを補足して行きたい。

註

- 一、以下数字は岩波文庫版ヒルティ『幸福論』第一部の頁数を示す。
- 二、本巻所収「幸福」冒頭、二三四頁参照。
- 三、「幸福」二二二以下参照。
- 四、ヒルティ自身は呪いではないと考えているようだが、その理由は明示されてはいないだろう。われわれは、ここにプロテスタンティズムの労働観の一面を見ることが出来るように思う。しかし、後に考察するように、たとえばミルトンの『樂園喪失』に描かれている思想とは必ずしも一致しない。
- 五、小中学校やそのPTAでやっているボランティア活動などは、折角の機会を子供たちを仕事嫌いに仕立てるために使っているようにしか思えない。グリーン・ツーリズムも、現段階では、都会人が田舎を利用し尽くし、地方はただ経済的活性化の手段にしているに過ぎないと思われる。
- 六、ここに触れておくと、習慣形成の最も重要な要素について触れていないということは、ヒルティの習慣論の大きな瑕疵であろう。習慣論の古典的名著としては、アリストテレスの『ニコマコス倫理学』第二巻を第一に挙げねばならない。そこで著者は、〈徳〉が一つの習慣形成されるべきものであることを論じているのだが、正義や勇敢や節制の徳を形成するには、単にひとに正義の人と思われる行為をめざして行うのではなく、まさに徳ある人がするように行うことが必要であることを説く。〈徳ある人が行うように行う〉とはどういうことか、と我々は問わなければならない。
- 七、それがどうしてであるかは、習慣論の伝統から我々には明らかである(②の註で触れたようにヒルティには欠陥がある)。たとえば、稽古事で稽古を休んでいる間に上手になるということがある。なぜか。手先の仕事であっても、そこには精神が指導しているのである。真の休息の間には、最も大事なものが指導する精神に披かれ、精神が最も大事なものの指導下に入ることになるからである。

八、"Der kleine Wählig Wörterbuch der Deutschensprache"

- 九、M・ウェーバー『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』(岩波文庫)一三〇—三二頁
- 十、ヒルティがダンテを愛読したことは注目に値する。だが、ダンテの世界、ダンテの「天国」はヒルティにおいては人間生活の目当てとされてへいなかったということは、さらに驚くに値するであろう(「幸福」二〇八—九頁)。
- 十一、ウェーバー、同右一〇九頁。
- 十二、同右一六六頁。
- 十三、Duden Deutschen Universalwörterbuch の Ruhe の項には第一に durch kein Geräusch und lebhaftes Treiben gestörter Zustand (つまり、騒音や騒々しい活動によって邪魔されない状態)、とあるが、用法としては eine wohlwollende, friedliche Ruhe (つまり、きもちのいい穏やかな安らぎ)、というものが見られる。
- 十四、とすると、ここにすでに大きな誤りがあることになる。幸福を、そのように捉える限り、ひとは底なしの沼に足をすくわれることになる。ヒルティ自身、成果を必要条件とはしていないであろう。
- 十五、アリストテレス『ニコマコス倫理学』第二巻第七章。徳が複数あれば、最も優れた徳にしたがっての活動というのが、アリストテレスの幸福の定義である。
- 十六、そこでは、ヒルティは「尊い生涯」を指して、これが幸福だと述べ、論述を終わっているが、少々皮肉にとれば、論旨の展開は全く不明であると言える。道徳的、良心的であってそれに満足していることというのは、ヒルティの幸福観にはない。(二二九—二〇頁)。これは人間には許されていないからである。(二一〇頁)。しかし、他面で信仰にもとづく「心楽しさ」というものを「本当の幸福感」として評価している(二三三—三頁)。結局、議論の筋道はまるで分からないことながら、カトリックの人たちが生活の目当てにする「閑暇 otium」(J・ピパー『余暇と祝祭』参照)にあたる「我々の努力が息んだところに自ずから

生じるもの」といったものをもって、幸福もしくは幸福感としている（二四四―四六頁）。

十七、後に第四章で論じることにする。実際はヒルティ自身がこの本で（二十三頁）触れていることなのだが、それを一言で言い直すところなるだろう。「最も大事なことをやれば他のことはどうでもよくなる」。あるいは、「絶えず大いなる思想のうちに生きるように、また詰まらないことは軽蔑するように、努めなさい。これが仕事をする上での金言である」（ヒルティ『眠れぬ夜のために』一月一日の項参照）。つまり、大きな目的を抱いて生き、個々の仕事をその目的に適合するものと位置づけるならば、個々の仕事はこの大いなる目的が受肉したものとなる。その都度、われわれは大いなる目的を実現しつつあるのである。神がわれわれの仕事に宿っている、と言い換えることも出来るのである。

十八、白水社『シュヴァイツァー撰集』第七卷三〇七頁。

十九、『莊子』（中央公論社『世界の名著』）三二二頁。

二十、『学校と社会』（岩波文庫）第一章。

二十一、以下の論は、M・ハイデッガーの『技術論』に多くを負っているであろう。

二十二、『ニコマコス倫理学』第一卷一―二章。